

< 県研究主題 >

心と体を一体としてとらえ、児童一人ひとりが生涯にわたって運動に親しみ、自らの健康・体力づくりを考えて行動する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 鈴木 勇大 (川崎地区)

< 研究主題 >

「体と心を育てる体育学習」

～めあてをもって主体的に学習に取り組み、運動の楽しさを味わえる子をめざして～

1 提案内容

第6学年のボール運動「ネット型」において「何とか拾って、みんなでつないで、相手コートに返して得点を取り合う」をテーマに、すべての児童が自分のめあてをもち、主体的に解決しながら、さまざまな運動の楽しさを味わえることを目指していく。そのために、技能、態度、思考・判断の指導内容を明確にし、具体的な指導方法のプランを立て、児童がそれらをバランスよく身に付けられるようにする。

(1) ルールの提示や工夫

ア 児童がまずは、安心してゲームを楽しむことができるようにするために簡易化されたルールを提示する。児童が自分の上手になりたいことや作戦を考え、本気で取り組めるようにするためにルールを工夫していく。

(2) 引き出す動きと動きの引き出し方

ア 引き出す動きは、授業前半は、つなぐ、素早く移動、相手に打ち返す、素早くボールをあげる、ジャンプをして相手に打ち返す、打ち返す直前にキャッチとし、授業後半は、相手がいなくてねらう、フェイント、ブロックとする。

イ 動きの引き出すために、ゲーム中により動きを見付け、どうしてそこに動いたかなど、問いかける。また、2つの動きを比較させて、どちらがつながりやすいか、点がとりやすいか考えさせる。

(3) 想定されるめあてとめあてのもたせ方

ア めあては、授業前半は、協力、一生懸命、返す、つなぐなど、授業中盤は、どうつなぐか、どう返すか、授業後半は、どうつないでどう返すかと発展できるようにする。

イ ゲームや練習の時に、よい動きを見付け合い、振り返りの時間にそれを伝え合うことで、めあてがもちやすいようにする。

(4) めあてに向かって、必要感から自分達で取り組む練習

ア めあてに合った練習が見られたら賞賛し、その練習がよいことを伝える。

イ 児童が練習方法を決められない場合は、AとBの練習方法を提示し、選べるようにする。

(5) 主体的に取り組み、運動の楽しさを味わうことのできる道すじ

ア 学習のねらい

ゲームで攻防するためのボール操作やボールを持たないときの動きを身に付け、友達とルールを工夫したり自分のチームの特徴に合った作戦を立てたりして、ソフトバレーボールを楽しむ。

## イ 学習の道すじ

1・2時間目（やってみる）	3・4時間目（広げる）	5・6・7時間目（深める）
<b>【ねらい】</b> 簡単なルールでボールをつないだり打ち返したりしてゲームを楽しむ。	<b>【ねらい】</b> ボールの打ち方や動き方を知り、ルールを工夫してゲームを楽しむ。	<b>【ねらい】</b> 自分のチームの特徴に応じた作戦を立て、得点を競い合ってゲームを楽しむ。
<b>【指導のポイント】</b> ・ルールを守ってゲームを楽しむことを伝える。 ・得点するために必要なポイントを考えるよう伝える。	<b>【指導のポイント】</b> ・ボールの打ち方を伝える。 ・ボールの方向に体を向け、素早く移動することを伝える。	<b>【指導のポイント】</b> ・チームで話し合い、チームのめあて（作戦）を考えることを伝える。 ・ボールの打ち方や動きのポイントを意識してゲームに取り組むことを伝える。
考え気付かせる（全員）→考え気付いたことを伝える（チームや個人）		

## 2 協議内容

### (1) チーム編成について

ア 子どもの技術や身長等を基に、教員と児童で一緒に決めた。

イ コートの広さに合わせて、何とかボールを拾える人数を考えて4人とした。

### (2) ルールについて

ア 強いボールが来ると怖いという児童がいることや、チームで何とか拾って返すことを達成するために、サーブを投げ入れとした。

イ チームで何とか拾って返すことを達成するために、アタック等を両手OKとした。

ウ チームで何とか拾って返すことを達成するために、ネットの高さを180cmにした。

### (3) めあてのめたせ方について

ア 実際にやってみることで、児童にめあての必要性を感じさせる。

イ 動きの中で言葉かけをすることで、必要なめあてを引き出す。

## 3 まとめ

### (1) 教員が育てたい力を明確にすることが大切

ア 育てたい力を明確にして、学習を成立させるために、子どもの技能でできることと、考えて変化させることができることまで考えてルールを簡易化させる。

イ 教員が意図する動きを引き出すために、なぜその動きがいいのかを意識した言葉かけを準備しておくことが重要である。

### (2) 思考・判断の力を育てるために

ア 練習や動きを比較させて選択させることは、思考力を高めるうえでとても重要である。どう

してそれを選んだかを考えることが、思考力の向上につながる。

イ 振り返りで自分の状況をどのように理解させるかが重要である。そのために、児童が自分の動きに、客観性をもてるための手立てを教員が準備しておく。

ウ めあてのもたせ方は、単元の中でどのような力を育てたいかを明確にして、めあて自体が段々と成長していくような手立てを教員が準備しておく。

## 提案 2

提案者 浦中 直人(県西地区)

### <研究主題>

意欲的なかかわり合いの中から学びを高めていく体育学習

～「ボール運動」 ゴール型： サッカー・バスケットボールの授業を通して～

## 1 提案内容

5年生、6年生の系統的なボール運動「ゴール型」の実践を通して、児童が相互にかかわり合う中から学びを高めていく様子、思考力・判断力の高まりを追及する。

### (1) 単元計画・学習内容の工夫

ア 1時間の流れを「ゲーム → チーム別練習 → ゲーム」と構成することで、練習したことをゲームで生かす姿勢が見られた。バスケットボールでは、サッカーの反省を生かして1時間の流れを「ゲーム → 話し合い・練習 → ゲーム」とした。

イ ドリルゲーム・タスクゲームを学習内容に組み込んだ。

ウ 単元計画や学習活動の工夫によって、コーチングの高まりや互いのよさの認め合いが見られた。

### (2) ルールの工夫

ア 児童やチームの実態を考慮してルール・コート・人数の工夫をすることで、どの児童も運動の特性に触れながら、意欲的に活動できた。

### (3) 児童が意欲的にかかわり合う場の設定

ア コーチングのレベルを「応援・励まし」→「要求」→「指示」と高めていく。

イ 対戦相手からのアドバイスを取り入れることで、チームを超えた学び合いが見られた。

ウ 作戦ボードを活用することで、チームの作戦や動き方を確認できた。

### (4) 学習カードの活用

ア 学習カードの活用によって、自分とチームのめあてを明確にした。参考になったプレーやアドバイスの紹介も取り入れた。

イ 学級通信にアドバイスが上手だった児童のコメントを載せることで、児童の意欲を引き出した。

## 2 協議内容

### (1) コーチングの指導の声のかけ方は、どのように行ったか。

・「声かけは、みんなもそのスポーツのプロでも共通してできることである」と全体に指導した。

- (2) 他教科での言葉のかけ方は、どのように行っているか。
- ・自分の気持ち伝えることが大事だと日頃から意識させている。
- (3) 技能を高めることは、ゲームにつながったか。
- ・ドリルゲームとタスクゲームはボールに慣れさせることを重視したが、ゲームの戦術理解は薄くなってしまった。
- (4) 児童の言葉のかけ方が柔らかく、発表を聞いていて心地よかった。
- ・初めは、きつい言葉のかけ方も見られたが、コーチングのMVPを学級通信に載せることで見られなくなり、学級経営につながった。
- (5) 作戦でどんなものがあったか。
- ・背の高い子がゴール下に行く、アウトナンバーを上手に活用するなどの作戦が見られた。

### 3 まとめ

- ・ドリル・タスクゲームは意欲、技能を高める上で有効であった。
- ・ルールを考えさせる際は、学習指導要領をもとに指導する。
- ・系統的な指導ができる年間計画の作成が必要である。
- ・日ごろ運動する機会の少ない児童も技能を習得できた。学習規律がよく、話合いの内容が明確になっていた。

### 4 全体演習

「確かな学力」を育成するための年間指導計画及び評価計画の工夫・改善をテーマに、年間指導計画（ボール運動系）の作成をグループに分かれて行った。

- (1) 3～6年の全学年にベースボール型の授業を配置した場合
- ・2～4年生でキックベース、5年生で投げたボールを打つ。6年生でソフトボール。全体的にバランスよく指導計画を立てることができる。
- (2) 3～6年の全学年にネット型の授業を配置した場合
- ・3、4年生でキャッチバレー（バウンドあり）を、5、6年生ソフトバレーを行い、できるだけ内容がつながるようにする。ネット型ゲームと低学年のボール投げゲームとのつながりが難しい。
- (3) 3～6年の全学年にゴール型の授業を配置した場合
- ・手を使ったゴール型→足を使ったゴール型へと組み込む。ベースボール型が少なくなる。4年生では多様な動きを身に付けさせたい。
- (4) 3～6年の全学年に陣地を取り合うゴール型の授業を配置した場合
- ・低学年から系統立てるといい。高学年で作戦や攻め方を考える。各学年の4～5月に入れて学級経営にもつなげる。この経験がネット型や、その他のゴール型につながるとよい。